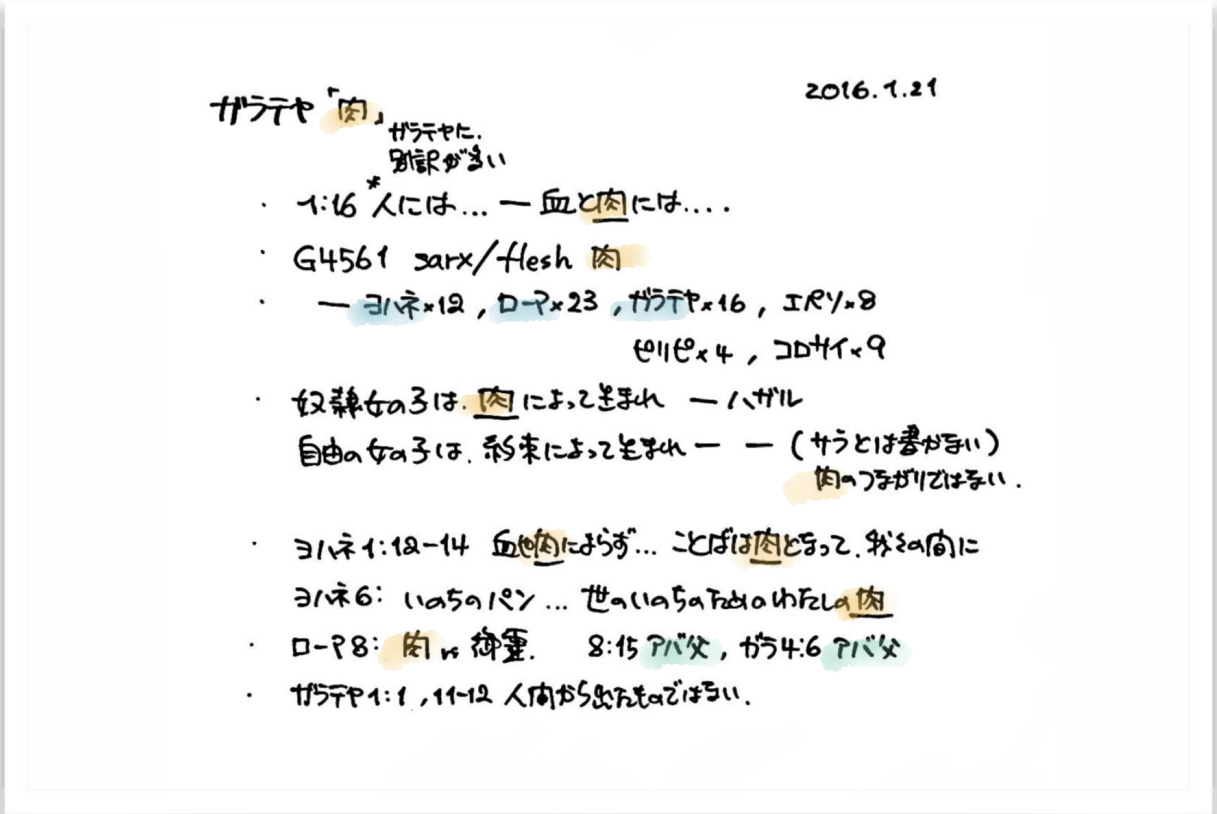
ガラテヤ人への手紙 1-6章

ガラテヤ人への手紙



ガラテヤ人への手紙の新改訳の聖書に別訳が多いです。☆印がついているところが多いのですけれど、解釈が難しいという議論がいろいろあるということなのでしょう。

例えば、1章16節、「人には」と書いてあるところが、「血と肉には」と。この肉ということばが、ギリシャ語の4561の番号ですけれど、これがガラテヤ人への手紙に多いということです。他に多いのが、ヨハネ福音書と、ローマ。エペソ、ピリピ、コロサイにも少しずつありますけれど、特にガラテヤ、ローマの中で、強調されている「肉」と「御霊」という戦いですね。

女奴隷の子どもは肉によって生まれる。自由の女の子どもは約束によって生まれると書いてありますけれど、奴隷の女のほうには、ハガルと書いてあるのに、自由の女のほうには、サラと書いていないのは皆、気がついてしまいますよね。サラと書いていないのは、肉のつながりではないのだ、肉の子どもではないので、サラという名前を出さないのかなと思いました。肉の話は、ヨハネ福音書の出だしの1章12節から14節のところ。血と肉によらずというところです。ことばは「人」となって私たちの間に幕屋したという説がありますけれど、そこは、ことばは「肉」となって…ということです。ヨハネ福音書6章の中に、「わたしはいのちのパンである」という話がありますが、その中で私の肉を食べるという肉の話が6章の中で、ユダヤ人と議論していますね。ローマ人への手紙の8章。ローマ8章が、ガラテヤ人への手紙の要約のようになっています。
「肉」vs「御霊」です。ローマ人への手紙の8章15節に「私たちはアバ父と呼ぶ」、ガ

ラテヤ人への手紙の4章6節にも「私たちはアバ父と呼べるようになる」という同じポイントが出てきます。ガラテヤの1章1節、11節から12節のところに、「パウロは使徒となったのは、人間から出たことではない」ということがずっと強調されていますよね。それは、肉から出たのではないという言い方ではありませんけれど、同じように、肉によらない、人間のつながりによって与えられたものではないということが、この手紙の出だしから言われているところです。